

# ヴィクトリア朝のある紳士と雑役女中のロマンス 手とブーツのフェティシズム

西村 美保

## 序 論

本稿はヴィクトリア朝のある紳士と雑役女中 Arthur MunbyとHannah Cullwick の関係性を階級とジェンダーの観点から考察しようというものである。先行研究をふまえ、彼らの日記や、Munbyの詩を基に、二人のフェティシズムやオブセッション、Hannahに課されたプログラム、そして彼女の変装に焦点を当て、二人の関係性や社会背景との関連性、Munbyの女性労働者に対する見方、彼らが楽しんだゲームにおいて衣服が果たした役割等を吟味する。

## I Master and Servant

Arthur Munby (1828-1910) は弁護士を父に持つupper-middle-class出身の紳士であり、ケンブリッジのトリニティ・カレッジを卒業後、ロンドンのテンブル法学院で公務員として勤務する。仕事の傍ら、彼は趣味として女性労働者の生活に関する情報や彼女たちの写真を収集していた。その過程で、ロンドンで召使として働いていたHannah Cullwick (1833-1909)と出会う。Munbyはトリニティに在籍している頃から詩を書き、アマチュアの詩人として生涯の間に詩集を数冊出版している。1854年に設立されたWorking Men's Collegeにおいてラテン語の講師も務め、そこでラスキンと知り合う。また1864年に設立されたWorking Women's Collegeでも教鞭をとった。更に、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティを初めとするラファエロ前派とも交流があった。特にロセッティは、Munbyが持っていたロケットの中のHannahの写真を賞賛し、彼はそのことを大変誇りにしていた。

MunbyとHannahの出会いは、1854年の5月で、二人は出会った直後から交際を開始するが、当時は階級差のある男女の交際は許されなかったため、二人は周囲に対し実際関係を秘密にした。Hannahにとって雑役女中としての毎日を日記に書き、Munbyに送ることは彼から課されたプログラムの一環であり、彼に対する愛の証でもあったが、自分たちの交際を他人に知

られてはいけないという制約とプレッシャーの中、人目を忍んで日記を書くことはかなりのストレスであったと想像できる。

交際と言っても、二人が人目のある所で恋人同士として公然と出歩くことは不可能で、1861年にパディントン駅で待ち合わせした時のことをMunbyは次のように書いている。

...I went up at five o'clock to the Paddington Station. Hannah came there by 6.30: and after a word in private, we separated. She waited, walked about the platform, leaned on a rail, stood close by me: but always we were strangers: no look betrayed her: she neither expected nor wished me to notice her. Base necessity which she does not feel the weight of, but I do. Other women would think it an insult to be thus ignored: she accepts it, takes it for granted, absolutely prefers it.<sup>1</sup> (emphasis added)

二人はすぐ側にいながら見知らぬ同士を装わなければならなかったが、Hannahの方ではそれを少しも気に留めていないようである。「他の女性なら」

ここでは恐らくMunbyと同じ階級のレディたちを連想しているのであろう。「こんな風は無視されたら侮辱と思うところを、Hannahは受け入れ、当然の事と見なし」、人前で恋人のように扱われるよりも、他人のふりをされることの方を好んでいる。つまり、階級の差異とその結果として起こる不条理な処遇などを社会の当然の前提としてHannahは受け止め、それに慣れてしまっている。しかし社会の矛盾に敏感なMunbyは二人が人前で会う際のこうした「恥ずべき必要」(‘Base necessity’)を重荷に感じている。いずれにせよ、二人は常に社会の厳しい眼差しを意識しながら歩くことを余儀なくされた。

Munbyが父親の援助で1857年に法学院の中の一室を借りてからは、二人はプライベートな時間を持つことが出来るようになる。しかしながら、Munbyの部屋を訪れる際もHannahは召使の服装のままであり、それは実際の関係性を隠蔽するカモフラージュでもあったが、彼らの衣服が表象する紳士と女性労働者、あるいは主人と召使といった関係性はMunbyの部屋の中でも継続したようである。その部屋でHannahがした事の多くは彼の足を洗うなど、召使としての性質が色濃く表れるものである。このようにMunbyは自分の部屋で彼女と会うほか、しばしば、Hannahが働いている家のそばまで行き、彼女が働く姿を離れたところからのぞき見ることもした。<sup>2</sup> 19年という長い交際期間の末、1873年に二人は結婚するが、結婚式に出席したのは、二人

の関係を知っていたHannahの妹二人と、いとこであり、Munbyの家族には知らされなかった。結婚後も、Munbyはその事実を公表せず、独身の時から住んでいる部屋で暮らした。Hannahは彼にその建物の召使として雇われ、普段は別々の部屋で暮らし、密かに部屋を行き来した。従って、他の住人の前ではお互い主人と召使の関係でしかないように装い続けたのである。

## II Arthur Munbyの手のフェティシズム

ヴィクトリア朝において支配的グループである中産階級の（あるいは貴族の）成人男性は家庭の頭であると同様に、社会システムの頭として見なされた。一方、周辺的なグループを代表する労働者は身体イメージにおいて手先として見なされ、こうした言葉が持つ含みは手先となるものがつまらない仕事をしたのに対し、中産階級の男性たちは頭脳労働をしたということであった。Munbyが女性労働者の情報と写真を収集したことは、言い換えれば手先の代替物の収集であったが、彼はまた特に彼女たちの手そのものにも強い愛着を示している。<sup>3</sup> その一例として、1860年の8月のある日、彼は外観から明らかに召使と思われる女性のそばを通り過ぎようとして、彼女の手が気になり、話しかけている。

...She was a maid of all work at Chelsea, it seemed. . . I looked at her hands, and spoke my opinion of them. 'How can you like them?' she says, like Margaret in the garden; 'they are so large and red, I'm ashamed of them.' 'They are just the hands for a servant,' say I: 'they show you are hardworking, and you ought to be proud of them. You wouldn't wish them to be like a lady's?' <sup>4</sup>

彼女はあかぎれの大きな自分の手を恥ずかしがり、目の前の紳士がなぜその手を気に入るのか理解できずにいるが、Munbyは彼女の手を労働の証だとし、誇りにするよう諭す。しかし、上の最後のMunbyの言葉に対し、女中は「レディの手のようにになりたい。あなたの手のようだったらいいのに」と羨ましそうに彼の手を見つめて言うのであった。

手はMunbyの詩によく現れる彼のお気に入りモチーフの一つでもあり、中には手そのものをタイトルにした詩もある。そうした詩の一つ、'Two Hands'<sup>5</sup>には彼の働く手に対する嗜好が非常に良く表れている。この詩においては、二つの手 レディの手と女性労働者の手 が対照的に描かれてい

る。レディの手に関しては、その美しさと繊細さを讃えながらも、彼女たちの手は観賞用以上の働きが出来るのだろうかとアイロニカルであるが、後半の女性労働者の手についてのMunbyの言葉は賛美そのものである。

This is her hand, her large and rugged hand:  
 Strong nervous fingers, stiff with homely toil,  
 Yet capable; for labour cannot spoil  
 Their native vigour, nor their swift command  
 Of household tools, indoors or on the land.  
 What if rough work must harden and must soil  
 Her massive palms? They are but as foil  
 To that sweet face which all can understand. (ll.15-22)

特に上の最後の3行には、女性労働者の手に対する深い愛情と応援の気持ちが込められている。そして、最終スタンザでは自己犠牲による労働の美しさが謳われている。

Yes, all enjoy the beauty of her face;  
 But few perceive the pathos and the power  
 Of those broad hands, or feel that inner grace  
 Of which they are the symbol and the flower:  
 The grace of lowly help; of duty done  
 Unselfishly, for all - for anyone. (ll.23-8)

このように女性労働者の手を賛美する一方で、Munbyの日記には、彼女たちと動物のアナロジーが多く見られる。1861年7月の日記にはゴリラの剥製を見に行った際、その手から農場や炭鉱の労働者の手を思い出したと書かれている。動物のアナロジーはMunbyの文章にユーモラスなトーンを与えると同時に、それは身分の低さや降格だけでなく、獰猛なまでの強さや(家畜であれば)だまって忠実に従うことをも示唆している。Munbyは女性労働者の何人かと友人になるなど、彼らと対等であろうとしたのかもしれないが、彼らを見る彼のまなざしにはアンビバレントなものがあり、そうした彼の姿勢に若干の疑いを差し挟む余地を与えている。

### III Degradation 降格と救済のプログラム

Hannahは召使の階級の中でも最下層の雑役女中<sup>6</sup>であったが、Munbyに出会って、彼女の働きぶりは一層拍車をかけられた。というのも、彼は、献身と奉仕による愛が最高であると彼女に教え、自分への愛の表明として、日記をつけることと真っ黒になって働くことを要求したのである。Degradation（自分の身や品位を貶めること）は彼らのゲームとプログラムの一部であった。Hannahはそれを忠実に実行し、時には必要が無くても、彼に汚れた姿を見せたいがために煙突掃除をした。Derek Hudsonは1862年7月29日にMunbyがHannahに会いにキルバーンに行った時のことを次のように解説している。

The diary at this period affords fresh evidence of the unusual relationship that had grown up between Hannah and Munby. On 29 July, a day of 'special drudgery' for Hannah, Munby made a trip to Kilburn to 'see her in her dirt' (Hannah's 'homely phrase'). Where another girl would have beautified herself for her lover, Hannah's great joy was to show herself to Munby as dirt as possible. In so doing, she hoped to fulfil his prescription of salvation through toil and degradation. 'If there were, as I would there were, any more excellent way in sight,' writes Munby, 'how loftily she would walk in it, who has thus overcome the vanities and weakness of woman's nature. . . .'<sup>8</sup> (emphasis added.)

MunbyはHannahに対し、働くことによって、女性の虚栄と弱さを克服させ、美德を積み、神による救済を密かな最終目標としてイメージしていたのではないと思われる。虚栄と弱さの連想は女性一般に対し、なされてきたことかもしれないが、相手がレディであれば、その克服と救済のためのゲームを彼も課すことはなかったであろう。従って、こうした発想自体に彼の階級意識と、そのおごりが感じられはしないだろうか。ヴィクトリア朝のイデオロギーにおいて、女性は女と淑女の二通りに区分されていたことは良く知られており、<sup>9</sup> こうした区分に見られる女性間の社会階級に基づく差別が社会生活の隅々に浸透していた。労働者階級の女性に求められた女性像は「善良な女」になることであったが、中産階級の女性の理想的な女性像として称揚されたのは、「淑女らしい主婦」であり、「家庭の天使」であった。また、中産階級の女性は救済の使者とみなされていた。Munby

が考える女性の「弱さ」には肉体的誘惑に対する連想もある。救済あるいは慈善という行為そのものが中産階級の人々のアイデンティティを形成していたが、Hannahに対して神による救済をイメージして労働を奨励した事実は、彼の中にも女性労働者＝「女」という、ヴィクトリア朝のイデオロギーが浸透していたことの表れであろう。

#### IV Degradationと隷属 ブーツのフェティシズム

HannahはMunbyと出会う以前に、Byronの悲劇、Sardanapalusを観て、感銘を受けている。それは王様と奴隷の愛の物語であり、Hannahは自分の理想とする愛をそこに見出し、自分をその奴隷と同一視したようである。したがって、HannahにとってMassa<sup>10</sup>（彼女はMunbyをこう呼んだ）は彼女の主人であり、彼に従い、奴隷のように尽くすのが自分の愛であると信じていた。その象徴として手にはストラップを、首には彼が鍵を持っているslave chainを付けていた。<sup>11</sup> 彼女はdegradationを徹底して受け入れ、楽しみ、自らを犬に見立て、夢の中でもたびたび犬になった自分を見た。また、あえて犬のように四つんばいになって掃除し、自分の体を真っ黒にしたことなども日記に書き、Munbyに報告している。更に、彼の足を洗う前にブーツにキスをして、なめて汚れを落とすことも自ら好んで行き、習慣化した。

I dreamt as I saw a lady stoop on her knees and lick her husband's boots cause he was going away for a while and so I thought surely if she does such a thing for love I needn't think it too much in licking Massa's boots. I shall do it the more. I thought of when I went to him as I used to of a Sunday and knelt down and licked his boots so many times and so joyfully that Massa wondered what it meant.<sup>12</sup>

このように、夢の中にまで、ブーツが現れ、彼女の欲望が煽られている。もはやHannahにとってdegradationはMunbyが当惑する程のオブセッションの域に達しつつあった。また、奉公先でブーツを洗うのは彼女の仕事であり、彼女の日記の冒頭には常に何足のブーツを洗ったかという記述がある。(図1) 数が多ければ多いほど満足した。洗い上げたブーツの数は彼女の労働の証であり、誇りであった。



図1 ブーツを洗うHannah (1864年)



図2 コントラスト：女性的な男性と男性的な女性 (1860年代に描かれたMunbyのスケッチから)

## V 女性労働者に惹かれる背景

Munbyの中にヴィクトリア朝のイデオロギーを垣間見たり、彼が女性労働者に惹かれた理由を考える時、以下の乳母室をめぐるDavidoffの見解は重要である。

It seems clear . . . that many of the preoccupations of the Victorian middle class and many of the dichotomous themes which pervaded their world-view were laid down in childhood, even infancy, and that, even though the mechanisms are not yet completely understood, class as well as gender divisions were, partially at least, created in the nursery.<sup>13</sup>

召使が二，三人いる中産階級の家庭では、淑女は幼児や赤ん坊の物理的な世話を乳母やメイドに任せていた。乳母は子供たちに対し権力を持っていたが、子供たちは乳母が自分たちより階級が劣るものであり、より権威のあるものに従属するという意味で自分たちと同類であるということをし

ぐに学んだ。乳母に影響を受けながら、労働者階級の禁じられた世界に子供たちは魅了され、そればかりか、若い召使は中産階級の男性の性的対象となる場合もあった。中産階級の子供や、男性にとって、母親がいかに素敵であっても、愛の対象としては実体がないに等しく、その代用物としてのメイドがいたのである。Munbyも家庭の天使の化身のような愛情深い母親がいながら、実際には乳母（彼女もHannahという名前であったが）に育てられた。従って彼の労働者の生活に対する尽きせぬ興味の種が育児室において蒔かれ、育まれたのではないかと考えるのは自然であろう。

## VI ジェンダーの逆転

Munbyが労働者の女性たちに感じた魅力の一つに、当時の理想的な femininity とかけ離れた体格があるかもしれない。Munbyは1863年にJermyn Streetで一人の牛乳配達員の娘が労働者の男性と話しているのを見て、スケッチをした。1869年には、お気に入りのやはり牛乳配達員の女性の隣で自分が立っている絵を描いている。(図2)これらのスケッチについてBarry Reayは、  
 ‘... Munby saw gender ambiguities not just between the massive women and small men, but in the very bodies of the women themselves in their own bodily contradictions of refined expectations of masculinity and femininity.’<sup>14</sup>と述べている。こうしたジェンダーが混在する対象を描いたMunbyのスケッチや写真には、アクロバットの女性や、炭鉱の女性なども入っている。

1860年に、Munbyがある田舎宿で、男性の友人たちとディナーの席にいた時、大きく、赤く荒れた手をして、腕をむき出しにした女性が給仕をしたが、彼は彼女の手と友人の手を比較する。彼自身を含めテーブルについた男性の手は全て繊細で指輪をしている。一方後ろに立って給仕する女性の手は非常に大きくごつごつしている。Munbyは彼らのジェンダーと身体的特徴を比較し、この場合逆転しているのではないか、「生の均一化」の中では、「性」や「地位」という言葉はどれだけの価値を持つのだろうかと書いている。<sup>15</sup>

そして、Munbyは「ジェンダーの交配種」(gender hybrids)<sup>16</sup>の一人と結婚したことになる。雑役女中の仕事によって、Hannahの体は鍛えられ、二人きりの時には、彼女が彼を持ち上げて部屋を歩き回るゲームを楽しんだ。<sup>17</sup> 体格の変化により、性の境界線を越える現象も、Munbyにとって、興味深いことだったのである。





図3 ヴィクトリア朝の手と頭：Wiganの炭鉱婦とMunby（1873年）



図4 Hannahの異性装（HannahはMunbyと一緒に歩くのに男装を思いつくが、実行に移すことは断念した《1861年》）



図5 レディのファッションで身を包むHannah（1857年）

更に服装によるジェンダーの逆転も彼にとって魅力があったのか、彼は男性的な仕事着を着た女性や(図3)、仕事や賃金のために男性として通した女性の異性装者に興味を持った。<sup>18</sup> Munbyは労働者の女性たちばかりか、アクロバットの女性たちを見るのも好きであったが、彼女たちのファッションに多くの理由があると思われる。また、Hannahもある時、Munbyと一緒に歩くために男装を思いついたが、実行に移されることはなかった。しかしながら、髪を短く切り、男装した姿は写真に収められている。(図4)

## VII 変身のゲーム 手袋をめぐる葛藤

Hannahの39回目の誕生日の週末、Munbyは彼女を小旅行に連れ出す。それは彼女がレディとして装い、Munbyに週末に連れ出されるという彼らの関係性の新たな段階の始まりであった。<sup>19</sup> (図5) 結婚後も、週末など、小旅行をする際、MunbyはHannahにレディに変身することを要求した。Hannahは近くの駅でレディの服に着替え、旅行中はほぼ完璧にレディを演じ、帰りはまた、同じ駅で召使の服に着替えてから二人が住む建物に戻るということをしていた。勿論彼女も言葉遣いで失敗することもあったが、<sup>20</sup> 彼にとっては階級は言葉よりも、体により刻みこまれているように思われた。そのため、Hannahがしばしば、その顔立ちから、実際よりも身分の高い生まれであると人から思われたり、言われたりした時、Munbyはそれを誇らしく思った。そして彼女のレディにも見える顔立ちと男性的な体格とのコントラストがより彼を惹きつけた。しかし、この階級は体により刻みこまれているという意識がHannahの容姿の衰えをMunbyにとって、一層深刻なものにした。彼は自分の課したプログラムの結果に苦しむことになるのである。Hannahの容姿の衰えはひどく、特に手の荒れ方はMunbyを心配させた。そして気づいた時には時遅しで、Hannahを止めることは出来ないと悟る。彼女は汚いということで同僚からいじめられたと泣いて彼に報告したり、ディナーの席で仕えるには汚すぎるという理由で解雇されたこともあった。

Munby自身の中に矛盾があることは明白である。個人的には、彼はHannahの手に限らず、労働者の女性たちの手を気に入っていて、彼女たちのざらざらした手に触れることを好んだが、Hannahがレディとして変装する時には、手袋を着用するよう要求した。レディの衣装はHannahの日常を消したが、手だけは彼女の労働の日々を率直に物語ってしまうからであった。人相学の観点からも、特に手は顔と同様に、階級と洗練を指し示すものとして、とりわけ重要であったと言われている。<sup>21</sup> 手は階級と職業の象徴であった。白く、かawaii手は女らしさは勿論のこと、上流階級であることを示唆していたが、同時にそれは屋内での育ちとライフスタイルをも象徴していた。手が小さいほど、所有者は洗練されていると見なされていた。

ファッションによる階級とジェンダーの逆転と、その結果として他人の目を欺くことに成功する様を二人は楽しんだ。特にMunbyはレディであり

ながら召使でもある女性を前にして、非常に満足していた。

. . . Hannah now sat gracefully reclining in an easy chair; drest in black silk and lace, with a pretty ruff round her long throat, and her bright crèpe brown hair neatly drest, and a wedding ring and ‘keeper’ on her clean and shapely hand . . .

I, the sole spectator of this comedy, looked at her with half-incredulous admiration: can it be, that this handsome and dignified lady is really not a lady, but is acting a part, and one she never learnt? Can she really be only Hannah, the maid-of-all-work who cleaned my boots this morning? What a shame, then that she should ever go back to such work! And yet, the wonder is, that she prefers that condition of life to this.<sup>22</sup> (emphasis, added)

しかし、Hannahはレディの変装を徐々に拒むようになる。以下の日記では手袋をめぐって彼女がMunbyを責めるシーンが描かれている。

But chiefly she was distressed at having had to spend money on gloves and a veil. ‘It’s a shame of you, Massa’ she said, ‘to make me wear a veil or gloves, ever; things I’ve never been used to in all my life!’ ‘Look at this hand!’ my darling said again, very earnestly, holding out that strong and true right hand of hers . . . ‘Look at this hand, how broad and spread with work it is!’ Is that a hand to put a glove on? Why, I canna bear to wear gloves, they make my hands as foolish as a stuffed tabby!’ . . . How sad it is I could only say you love to be as you are, and I love you best as you are; & yet we must dress you up like this, whenever we go out together!<sup>23</sup>

ここでのMunbyの反応には悲しみと諦めの入り混じった感情、世間と個人の間で板ばさみになっている様子が伝わってくる。こうしたHannahのレディの変装に対する強い反発はその後も続き、ついにある日、彼女のストレスもピークを迎え、‘. . . I will be your servant to my life’s end and I hope you’ll never take me out again as a lady. It makes me miserable; I feel so useless & idle!’<sup>24</sup>と叫ぶ。二人の同居生活は4年程で終焉を迎え、その後Hannahは田舎へ移り、長い別居生活を送ることになるのだが、レディの変装の拒絶が彼らの結婚生活に亀裂を生んだ要因の一つであることは確かである。

Hannahは自らの階級と職業に誇りを持っていた。ただMunbyの要求に応じて演じただけで、レディになることを望みもしなかったし、それが可能だとも思わなかった。レディになろうとすれば、彼女の生き甲斐とも言え

る全ての仕事を放棄せねばならず、それは不可能であっただろう。レディの変装に対する彼女の抵抗や拒否は少なからずアイデンティティの問題が関わっていることやレディであることがいかに窮屈であるかをも物語っている。<sup>25</sup>

## 結 論

変身のゲームにおいて、Munbyの理想の女性像は召使でありながらレディでもある女性であると判明したが、それは成長過程で彼に影響を与えた二人の女性 家庭の天使の化身のような母親と長年育児室で生活を共にした乳母の姿 を彷彿とさせるものでもある。Munbyがヴィクトリア朝社会の基本的な矛盾をぼんやりとはあっても認識し、ジレンマを感じていたのは確かであるが、女性労働者を見るまなざしにはアンビバレントなものがある。彼は自らは中産階級の紳士であり、その成長の過程で、種をまかれた階級意識や中産階級のイデオロギーからは脱却できなかったように思われる。それはまた、Hannahが自身の階級に誇りを持ち、自分たちより上の者に対して奉仕するのが当然とする意識から脱却できなかったのと同様に。レディのファッションはHannahの男性的な体や、労働者としてのアイデンティティを隠蔽し、女性的な中産階級のレディとしての外観を与えたが、同時にレディの生活の制約の多さや召使の身体的自由を強調する結果となった。変装の成功の要因はヴィクトリア朝という社会そのものにあると言えるかもしれない。ことあるごとに男女の差異を強調し、ファッションが階級の表象であった社会においては、コスチュームと演技力の両方があれば、他人の目を欺くことが可能であった事実を変身のゲームは例証している。Munbyは衣服によって、ジェンダーと階級が変身する様を楽しんで見ていたことであろう。彼は女性労働者の生活に惹かれ、彼女たちの手に特別な愛着を抱き続けたが、自らの存在意義をより強く感じることできたのも女性労働者との関わりにおいてであった。一方、Hannahは彼女のアイデンティティの源泉である労働や汚れにこだわり続けた。このように、彼らの手とブーツのフェティシズムはそれぞれの複雑な心理の象徴である。

本稿は日本ヴィクトリア朝文化研究学会第5回全国大会（2005年11月19日、中京大学）での報告内容をもとに執筆した。本稿の作成にあたっては、日本学術振興会平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（c））の助成を受けた。

### 註

- 1 Munby's Diary, 29 July, 1861, quoted in Hudson, *Munby: Man of Two Worlds*, p.107. MunbyとHannahの日記に関しては、マイクロフィルム *Working Women in Victorian Britain, 1850-1910: The Diaries and Letters of Arthur J Munby (1828-1910) and Hannah Cullwick (1833-1909) from Trinity College, Cambridge (Wiltshire: Adam Matthew Publications Ltd, 2001)* をはじめ、Derek Hudson, *Munby: Man of Two Worlds* (London: John Murray, 1972) とLiz Stanley, *The Diaries of Hannah Cullwick*, (London: Virago Press, 1984) を主に参照した。
- 2 彼女に対するこうした行為は勿論のこと、女性の労働者に対する類似したMunbyの一連の行動を批評家は「覗き趣味」と表現している。また彼を表す的確な表現として、そのほかに 'flaneur' という言葉が使われることもある。労働者の女性たちを観察し、情報収集するMunbyの行為におけるこうした「覗き趣味」(avocation) やオブセッションは一見すると異常に思われるかもしれないが、多くの批評家が、その仕事や作品において同じような傾向が窺えるとして、Mayhewや、Walter (*My Secret Life*の著者)を挙げ、それがヴィクトリア朝において、さほど特別なものではないという意見で一致している。(Davidoff, *Worlds Between: Historical Perspectives on Gender and Class*. New York: Routledge, 1995) pp.114-5.
- 3 友人の中には働く大きな手に対するMunbyの執着に気付いた者もいたと思われる。1859年4月13日のMunbyの日記にはラスキンの家に行った時の事が描かれている。ラスキンがTurnerやW. Huntの絵のコレクションを見せてくれた際、Munbyは「誰かが農婦や女中をありのままに描くべきだ」という独自の意見を述べ、目の前のHuntの絵はありのままに描いているが、農婦やメイドなど滅多にリアルに描かれることはなく、白い手の女性として描かれていることが多い事を不満げに話している。
- 4 *Munby's Diary*, Tuesday, 21 August, 1860, Hudson, op.cit., p.71.
- 5 *Arthur Munby, Poems, Chiefly Lyric and Elegiac* (London: Kegan Paul & Co., 1901) pp.46-7.
- 6 パメラ・ホーンは*The Rise and Fall of the Victorian Servants* (London: Sutton Publishing, 1986) の中で、召使を保有する階級とその問題に関して一章を割いているが、ホーンによれば、「召使を保有する階級に入る人々は社会的地位や収入の両面でバラエティに富んでいた。ヴィクトリア朝中期の国勢調査の

結果はこうした人々の中にはつましい職業の人もいたことを教えてくれる。田舎の市場町においては6軒に1軒が住み込みのメイドを置いていて、雇い主の約5分の2が小売商、布地屋、八百屋、配管工、石炭商人、穀物商人などである。主に彼らはイギリスの家庭内の召使の中でも、最も一般的な形のサービス、雑役女中に頼っていた。そして1871年は国勢調査において、120万の女性召使のまさに3分の2がこの『一般の』カテゴリーに入った」(p.18.)ということである。こうした比較的貧しい家庭において要求される仕事はきつく、単調なものであった。

- 7 'degradation'はMunby自身が日記の中でこうしたコンテキストで使っている言葉である。
- 8 Hudson, op.cit., p. 132.
- 9 ジューン・パーヴィスは『ヴィクトリア時代の女性と教育』(ミネルヴァ書房、1999年)pp.7-11.において、この言葉が階級に応じて使い分けられていたことを例証している。またDavidoffは女性の二通りの区分に関する経緯や事情を次のように説明している。「宗教的信仰が危機的な状況にあったので、性的でないマドンナ(聖母)のイメージは重要性を増してきた。しかし、マドンナはマグダレーナ(マグダラのマリア)も暗示しており、ヴィクトリア朝文化と社会的制度は両方を提供した。女性に対する二重の見方は社会の階級的、女嫌いの解釈を強調するグラマースクールやパブリックスクールのカリキュラムを通して叩き込まれた文化、古典的文化からの遺産としてすでに得られていた。女性の二重の見方はまた、キリスト教神学の礎石であり、キリスト教神学は女性が潜在的に『肉欲が強い』ということを根拠に女性が男性に対し従属的であるべきだということを正当化した。女性らしさは身体と同一視されたので、女性は『自然の正しい秩序において肉が人間の生理に従属しなければいけないように』女性も男性に従わなければならないのだ。従って、ヴィクトリア朝の女性は労働者階級と中産階級の間で分かれていたばかりか、『淑女』と『女』の間で区分されてもいた。ヴィクトリア朝の女性を見ると、それはあたかも、我々が見方によって二重に見えるものを通して一枚の絵を見ているかのようである。」(Davidoff, op.cit., p.106)
- 10 'Massa'はOEDでは 'A negro corruption of master' と定義されている。HudsonはHannahがMunbyを 'Massa' と呼ぶことについて、「それは彼女が生涯彼の召使であるということを認識する彼女なりのやり方となった」と述べている。Hudson, op.cit., p.15.
- 11 Hannah自身、日記の中で'. . . I've bin a slave now 9 years & worn the chains & padlocks 6 years . . . .'と書いている。31 May, 1863, Hannah's Diary, quoted in Stanley, op.cit., p. 126.

- 12 Hannah's Diary, 26 May 1864, quoted in Diane Atkinson, *Love & Dirt: The Marriage of Arthur Munby & Hannah Cullwick* ( London: Macmillan, 2003 ) p. 126.
- 13 Davidoff, op.cit., p.108.
- 14 Barry Reay, *Watching Hannah: Sexuality, Horror and Bodily Deformation in Victorian England* ( London: Reaktion Books, 2002 ) pp.91-4.
- 15 Davidoff, op.cit., p.142.
- 16 Reayは*Watching Hannah . . .*の第4章*Disordering Bodies: Gender Hybridity*において外観からは男性なのか女性なのか決めかねるようなジェンダーの混在した対象をこのように呼んでいる。
- 17 Hannah's Diary, 31 May, 1863, Stanley, op.cit., p. 124.
- 18 彼女たちのファッションはヴィクトリア朝のファッションの規範からすると掟破りなものであり、二重の罪を持っていた。彼女たちのファッションがヴィクトリア朝の規範から逸脱していたばかりか、ヴィクトリア朝の人々の目には彼女たちは女性の衣服の下に男性の衣服を身につけていると見えたからである。そればかりか、短いスカートと男性が着用すべきズボンの組み合わせは彼女たちの足を強調し、エロティシズムさえ見るものに与えると思われた。
- 19 ( 図5 ) のように、レディのファッションでHannahは結婚する以前に写真を撮っている。このことは少なくともMunbyの部屋の中などで練習がなされていた可能性を示唆している。
- 20 1874年、旅先で、牧師館にお茶に呼ばれ、帰ろうとする時に、本物のレディなら決して言わないようなことを言ってしまう。いつもの習慣で 'Goodbye, Sir', 'Goodbye, Ma'am' と言ってしまったのである。
- 21 Ray, op.cit., p. 133.
- 22 Munby's Diary, 25 March, 1875, Hudson, op.cit., p. 378 この引用部分におけるイタリックによる強調はオリジナルの日記の中でMunbyによってなされたものである。
- 23 Munby's Diary, 6 August, 1874, *ibid.*, pp.371-2.
- 24 Munby's Diary, 5 October, 1876, *ibid.*, p.385.
- 25 フランスにハネムーンに行った際、Hannahはどこへ行っても、レディとして丁寧に扱われた。羽飾りとヴェールのついたフェルトの帽子をかぶり、「首周りにフリルがついたグレーのフロックの上に青いスカートとジャケットを着用し、白いカフスをして、子やぎの革の手袋をはめ、ストライプの日傘を持って すべてが慣れ親しんだものとは全く違ったので、ある日、電車に乗っていて、私はあまりにいろいろなものに包まれて、気分が悪くなりそうになった。そして両手がいつものように自由に感じられたらなあと思った。」

と日記に書いている。 Hannah's Diary, 30 August, 1873, Stanley, op.cit., p.266.

### 参考文献

- Anderson, Patricia. *When Passion Reigned: Sex and the Victorians*. New York: Basic Books, 1995.
- Atkinson, Diane. *Love & Dirt: The Marriage of Arthur Munby & Hannah Cullwick*. London: Macmillan, 2003.
- Barbre, Joy Webster, ed. *Interpreting Women's Lives: Feminist Theory and Personal Narratives*. U.S. A.: Indiana University Press, 1989.
- Davidoff, Leonore. *Worlds Between: Historical Perspectives on Gender and Class*. New York: Routledge, 1995.
- Davidoff, Leonore & Hawthorn, Ruth. *A Day in the life of a Victorian Domestic Servant*. London: George Allen & Unwin, 1976.
- Ford, Colin. *Britain in the 1880s in Words and Photographs*. Tokyo: Eihosha, 1983.
- Flanders, Judith. *The Victorian House: Domestic Life from Childbirth to Deathbed*. London: Herper Perennial, 2003.
- Ginsburg, Madeleine. *Victorian Dress in Photographs*. London: B. T. Batsford, 1982.
- Hiley, Michael. *Victorian Working Women: Portraits from Life*. London: The Gordon Fraser Gallery, 1979.
- Horn, Pamela. *The Rise and Fall of the Victorian Servant*. London: Sutton Publishing, 1986.
- Hudson, Derek. *Munby: Man of Two Worlds - The Life and Diaries of Arthur J. Munby 1828-1910 --*. London: John Murray, 1972.
- Huggett, Frank E. *Life Below Stairs*. London: John Murray, 1977.
- Lurie, Alison. *The Language of Clothes*. Tokyo: Eihosha, 1993.
- MacClintock, Anne. *Imperial Leather: Race, Gender and Sexuality in the Colonial Contest*. New York: Routledge, 1995.
- Marcus, Steven. *The Other Victorians: A Study of Sexuality and Pornography in Mid-Nineteenth Century England*. Book Club Associates, 1970.
- Marly, Diana de. *Working Dress*. London: B. T. Batsford, 1986.
- Munby, Arthur. *Working Women in Victorian Britain, 1850-1910: The Diaries and Letters of Arthur J Munby (1828-1910) and Hannah Cullwick (1833-1909) from Trinity College, Cambridge*. Wiltshire: Adam Matthew Publications, 2001.



- Purvis, June. *Women's History: Britain, 1850-1945*. London: UCL Press, 1995.
- Reay, Barry. *Watching Hannah: Sexuality, Horror and Bodily Deformation in Victorian England*. London: Reaktion Books, 2002.
- Robbins, Bruce. *The Servant's Hand: English Fiction from Below*. London: Duke University Press, 1993.
- Ruether, Rosemary Radford. *Religion and Sexism: Images of Woman in the Jewish and Christian Traditions*. Oregon: Wipf and Stock Publishers, 1998.
- Stanley, Liz. *The Diaries of Hannah Cullwick: Victorian Maidservant*. London: Virago Press, 1984.
- Taylor, Jonathan. *Mastery and Slavery in Victorian Writing*. New York: Palgrave Macmillan, 2003.
- Trudgill, Eric. *Madonnas and Magdalens: The Origins and Development of Victorian Sexual Attitudes*. New York: Holmes & Meier, 1976.
- Williams, Chris, ed. *A Companion to Nineteenth Century Britain*. Oxford: Blackwell, 2004.
- ジューン・パーヴィス 『ヴィクトリア時代の女性と教育』 香川 せつ子訳、ミネルヴァ書房、1999年。
- クリスティン・ヒューズ 『十九世紀のイギリスの日常生活』 植松靖夫訳、松柏社、1999年。
- ダニエル・プール 『19世紀のロンドンはどんな匂いがしたのだろう』 片岡 信訳、青土社、1997年。
- 村岡 健次 『ヴィクトリア時代の政治と社会』 ミネルヴァ書房、1995年。
- 度会 好一 『ヴィクトリア朝の性と結婚』 中央公論社、1997年。

(福岡教育大学助教授)

## "The last wolf" in Victorian Britain

Masaki SHIMURA

A. C. Doyle, in "The King of the Foxes," wrote a story in which a wolf flees from a zoo. The wolf is one imported from Siberia. Victorian British feared that beasts might invade from abroad. Wolves had disappeared in the 15th century in England, and in the middle of the 18th century in Scotland and Ireland.

In the same period, instead, appeared many stories about "the last wolf" in which how the last wolf disappeared was depicted. British people's interest in wolves focused on the fact of their extinction because Britain had been a country where there was no wolves, that is, vermin. Wolves were got rid of by hunters because they attacked human beings, preyed on livestock and did damage to games in the Forest. Hunters should defend their country against such beasts.

Harting, in one of his works, *British animals* (1880), traces the process of the extinction. Through analysing the work I proved that wolves were disposed of as a kind of vermin, and that hunting wolves was one of the finest sports.

Colonel Thornton planned to enjoy wolf hunting and import wolves from France to leave them at large in England. Although this plan provoked a backlash in the community, he tried to bring the dangerous beasts in. Hunters abandoned their responsibility for the country.

## Romance of a Victorian Gentleman and a Maid-of-all-work Fetishism of Hands and Boots

Miho Nishimura

In this article, the relationship between Arthur Munby and Hannah Cullwick will

be examined from the viewpoint of class and gender. It will focus on their fetishism and obsession, the program he assigned to her, and her disguise. In particular, the following will be illuminated: their interpersonal relationship and their relationship with the social mores of the time, Munby's view of working women, and the role of clothes in the game they played.

When he worked as a civil servant in London, in his free time, Munby collected stories and photographs of working women. Through this, he met Hannah, who was working as a servant in the city. Their relationship quickly developed into a remarkable and bizarre love affair.

In a society with strict social norms, they had to hide their real relationship. Fashion was an important tool for them to achieve this purpose. Hannah was in servant's costume when she went to his room and the public relationship as master and servant that their clothes represented was carried over into their private relationship. What he encouraged her to do was to write a diary and work hard until she become covered with soot. She followed this program of salvation and degradation so faithfully that her hands became rough and her fetishism of boots and dirt became intense. However, in this way, in his attitude toward Hannah, Munby's class arrogance is revealed.

After their marriage, they often went on weekend trips, when she dressed up as a lady and acted the part almost perfectly, which really satisfied him. A woman who is both a servant and a lady was his ideal woman. His fetishism of hands is vividly expressed in one of his poems and his obsession about them was strongly related to his background: his curiosity towards the working class and his middle-class ideology was nurtured in the nursery. Though Munby enjoyed seeing how class distinction can be subverted by clothes, Hannah gradually came to hate the transformation, largely because of the problem of her identity. Her refusal to wear lady's clothes also illustrates how a lady's life was constricted by social expectations. It seems that both of them could not completely free themselves from their class consciousness and ideology. However, there can be no doubt that Munby recognized the basic contradictions of Victorian society and felt conflicted, while Hannah tried to stick to her class identity. Thus, their fetishism of hands and boots symbolizes their complicated psychology.